

## I 時間追跡－単振動

### 【メモ】

・高校範囲で時間追跡可能な運動は、等加速度運動、単振動、速度に比例した空気抵抗の運動の3つであり、前2つはエネルギーによる解法の実行も可能。この問題では、一部時間追跡の誘導が付いているため、その問題については時間追跡で考える。

### 【解答】

問1 運動方程式より、

$$ma = -kx, \quad \therefore \omega_1 = \sqrt{\frac{k}{m}}.$$

問2 運動方程式は、

$$ma = -2kx.$$

問3 運動方程式より、

$$\omega_2 = \sqrt{\frac{2k}{m}}.$$

問4 物体のエネルギー収支を考えて\*1、

$$\frac{1}{2}mv^2 - 0 = \int_A^0 (-2kx) dx = \frac{1}{2}kA^2, \quad \therefore v = A\sqrt{\frac{2k}{m}}.$$

問5 ばね1が $x$ 伸びているとき、ばね3は $x$ 伸びており、ばね2は $2x$ 縮んでいる。よって、運動方程式は、

$$ma = -3kx.$$

問6 公式より、

$$T = \frac{2\pi}{\omega} = 2\pi\sqrt{\frac{m}{3k}}.$$

\*1 物体と2つのばねを合わせた系を考えて、以下の力学的エネルギー保存則を用いてもよい。

$$\frac{1}{2}mv^2 + 0 = 0 + \frac{1}{2}kA^2 \times 2.$$

問7 物体1の位置, および速度をそれぞれを  $x_1, v_1$ , 物体2も同様に  $x_2, v_2$  とする. 始状態で  $x_1 = +A, x_2 = -A, v_1 = v_2 = 0$  より, 物体の位置  $x_1, x_2$  はそれぞれ時刻  $t$  の関数として,

$$\begin{cases} x_1 = A \cos \left( \sqrt{\frac{3k}{m}} t \right), \\ x_2 = -A \cos \left( \sqrt{\frac{3k}{m}} t \right) \end{cases}$$

と書ける. よって, 各物体の速度は,

$$\begin{cases} v_1 = -A \sqrt{\frac{3k}{m}} \sin \left( \sqrt{\frac{3k}{m}} t \right), \\ v_2 = A \sqrt{\frac{3k}{m}} \sin \left( \sqrt{\frac{3k}{m}} t \right) \end{cases}$$

となり, 2物体系の運動エネルギーは,

$$\frac{1}{2} m_1 v_1^2 + \frac{1}{2} m_2 v_2^2 = \underbrace{3kA^2 \sin^2 \left( \sqrt{\frac{3k}{m}} t \right)}.$$

## II 電磁誘導 - $vBl$ , 電気回路

【メモ】

- ・ 静磁場中を導体棒が運動するタイプの電磁誘導.
- ・ 回路の状態決定は, キルヒホッフ則, 電荷保存則, 素子の性質で一意に決まる.
- ・ ジュール熱は, 以下のように分類して考える.

$$J = \begin{cases} RI^2 \Delta t & (I \text{ 一定}) \\ \text{エネルギー収支から逆算} & (I \text{ 非一定}) \end{cases}$$

【解答】

問1 公式より,

$$f = evB, \quad (\underline{y \text{ 軸正方向}}).$$

問2 素子の性質より  $I = 0$  ゆえ,

$$\phi_P = 0 - R \cdot 0 = 0.$$

問3 公式より,

$$V = vBl, \quad (\underline{y \text{ 軸負方向}}).$$

問4 キルヒホッフ則より,

$$vBl - RI - \frac{Q}{C} = 0.$$

ここで, 素子の性質より十分時間経過で  $I = 0$  ゆえ<sup>\*2</sup>,

$$Q = CvBl.$$

問5  $I = \frac{dQ}{dt}$ ,  $v = 0$  より, キルヒホッフ則は,

$$\frac{dQ}{dt} = -\frac{1}{RC}Q.$$

よって,  $Q$  は指数関数に比例する関数形となり, 初期条件  $Q(0) = vBl$  より,

$$Q = CvBle^{-\frac{t}{RC}}.$$

<sup>\*2</sup> 本当はキルヒホッフ則を微分方程式として解いて  $I$  を時刻  $t$  の関数として求めることでわかる事実だが, 受験では知識として頭に入れておく (例外もあるが, そのような場合は誘導に従えれば十分).

以上から,

$$I = \frac{dQ}{dt} = -\frac{vBl}{R} e^{-\frac{t}{RC}}$$

よりグラフは (エ) であり, 電流の向きは  $a \rightarrow b$  である.

問6 回路のエネルギー収支より,

$$J = -\Delta U = -\left(0 - \frac{1}{2} \frac{(CvBl)^2}{C}\right) = \frac{1}{2} c(vBl)^2.$$

問7 公式より,

$$F = IB\ell, \quad (x \text{ 軸正方向}).$$

問8 時刻  $t$  での導体棒の速度を  $u$  とする. キルヒホッフ則, および導体棒の運動方程式より,

$$\begin{cases} uBl - RI - \frac{Q}{C} = 0, \\ ma = -IB\ell. \end{cases}$$

題意より, 十分時間経過で  $a = 0$  より, 運動方程式から  $I = 0$  が言え, キルヒホッフ則より  $Q_{\text{fin}} = Cv_0Bl$  を得る. よって, 系のエネルギー収支より,

$$\frac{1}{2}mv_0^2 + \frac{1}{2} \frac{Q_{\text{fin}}^2}{C} + J = \frac{1}{2} \frac{Q_{\text{ini}}^2}{C}, \quad \therefore Q_{\text{fin}} < Q_{\text{ini}}.$$

以上から, コンデンサの帯電量は終状態よりも始状態の方が大きく, 十分時間経過で  $Cv_0Bl$  に収束していくことから (ウ) のグラフが適当.

問9 全体のエネルギー収支より,

$$J = -\Delta U - \Delta K = \frac{1}{2} C (v^2 - v_0^2) B^2 \ell^2 - \frac{1}{2} mv_0^2.$$

【補足1】問6のジュール熱を直接計算

定義より,

$$J = \int_0^\infty \left(-\frac{vBl}{R} e^{-\frac{t}{RC}}\right)^2 R dt = \left[\frac{(vBl)^2}{R} \left(-\frac{RC}{2}\right) e^{-\frac{2}{RC}t}\right]_0^\infty = \frac{1}{2} C (vBl)^2.$$

【補足2】問8を解く

$t = 0$  で  $v = 0$ ,  $Q = CvBl$  より, キルヒホッフ則から,

時刻  $t$  における速度を  $u$  とする。運動方程式の両辺を  $t$  で積分して、

$$\begin{aligned}m \frac{du}{dt} &= -\frac{dQ}{dt} B\ell \\ \therefore m(u - 0) &= -B\ell(Q - CvBl) \\ \therefore u &= -\frac{B\ell}{m}(Q - CvBl).\end{aligned}$$

キルヒホッフ則より、積分定数を  $A$  として、

$$\begin{aligned}\frac{dQ}{dt} &= -\frac{1}{RC} \left\{ 1 + \frac{C(B\ell)^2}{m} \right\} \left\{ Q - \frac{C(B\ell)^2}{m + C(B\ell)^2} CvBl \right\} \\ \therefore Q &= \frac{C(B\ell)^2}{m + C(B\ell)^2} CvBl + Ae^{-\frac{1}{RC} \left\{ 1 + \frac{C(B\ell)^2}{m} \right\} t}.\end{aligned}$$

ここで、 $t = 0$  で  $Q = CvBl$  となるように積分定数  $A$  を選べば、

$$Q = \frac{m}{m + C(B\ell)^2} CvBl \left( \frac{C(B\ell)^2}{m} + e^{-\frac{1}{RC} \left\{ 1 + \frac{C(B\ell)^2}{m} \right\} t} \right).$$

なお、 $t \rightarrow \infty$  で  $Q = Cv_0Bl$  より、

$$Q(\infty) = \frac{C(B\ell)^2}{m + C(B\ell)^2} CvBl = Cv_0Bl, \quad \therefore v_0 = \frac{C(B\ell)^2}{m + C(B\ell)^2} v$$

と  $v_0$  を求めることもできる。

### Ⅲ 固有振動－弦

#### 【メモ】

- ・固有振動の問題は図を描いて考察する。
- ・反射波と定常波を形成するとき、境界条件が固定端のときは節、自由端のときは腹を形成する。
- ・固有振動は弦（両端節）、気柱（開管が両端腹、閉管が腹と節）のそれぞれを押さえる。気柱の固有振動において境界が自由端のとき、開口端補正を考慮する必要がある。

#### 【解答】

問1 それぞれ図より、

$$\begin{aligned}\frac{1}{2}\lambda_A \times 4 &= 1 \text{ m}, & \therefore \lambda_A &= \underline{0.5 \text{ m}}. \\ \frac{1}{2}\lambda_B \times 1 &= 0.5 \text{ m}, & \therefore \lambda_B &= \underline{1 \text{ m}}.\end{aligned}$$

問2 波の基本式、および弦を伝わる波の速さの公式より、

$$f = \frac{v}{\lambda} = \frac{1}{\lambda} \sqrt{\frac{S}{\rho}}$$

つりあいより A 側、B 側の張力の大きさ  $S$  はそれぞれ  $M_A g$ 、 $M_B g$  ゆえ、問1 より、

$$\frac{1}{\lambda_A} \sqrt{\frac{M_A g}{\rho}} = \frac{1}{\lambda_B} \sqrt{\frac{M_B g}{\rho}}, \quad \therefore M_B = \underline{4M_A}.$$

問3 A、B それぞれの側で次の固有振動が起こるのは、A は 5 倍振動、B は 2 倍振動であり、それぞれの振動数  $f_A$ 、 $f_B$  は\*3、

$$f_A = \frac{5}{4}f_1, \quad f_B = 2f_1.$$

よって、先に固有振動が生じるのは 弦 OA の側であり、その振動数は  $f_2 = \underline{\frac{5}{4}f_1}$  である。

\*3 回りくどいが次のように計算してもよい。A 側の 5 倍振動、および B 側の 2 倍振動の波長  $\lambda_A$ 、 $\lambda_B$  はそれぞれ、

$$\begin{aligned}\frac{1}{2}\lambda_A \times 5 &= 1 \text{ m}, & \therefore \lambda_A &= \frac{2}{5} \text{ m}. \\ \frac{1}{2}\lambda_B \times 2 &= \frac{1}{2} \text{ m}, & \therefore \lambda_B &= \frac{1}{2} \text{ m}.\end{aligned}$$

A 側、B 側それぞれの波の伝わる速さをそれぞれ  $v_A$ 、 $v_B$  とすると、波の基本式より  $f_1 = 2v_A = 1 \cdot v_B$  ゆえ、A 側の 5 倍振動、および B 側の 2 倍振動の振動数は、

$$f_A = \frac{v_A}{2/5} = \frac{5}{4}f_1, \quad f_B = \frac{v_B}{1/2} = 2f_1.$$

問4  $f = 2f_1$  で次に両側で定常波が生じる (A 側では 8 倍振動, B 側では 2 倍振動). このとき, A 側では腹が 8 個の定常波が, B 側では腹が 2 個の定常波が生じる. よって, それぞれの波長は,

$$\begin{aligned} \frac{1}{2}\lambda_A \times 8 &= 1 \text{ m}, & \therefore \lambda_A &= \underline{0.25 \text{ m}}. \\ \frac{1}{2}\lambda_B \times 2 &= \frac{1}{2} \text{ m}, & \therefore \lambda_B &= \underline{0.5 \text{ m}}. \end{aligned}$$

問5 題意より,

$$\begin{cases} \frac{1}{2} \frac{v_A}{f_1} \times 4 = 1, \\ \frac{1}{2} \frac{v_A}{f_1 + 220} \times 6 = 1, \end{cases} \quad \therefore v_A = \underline{220 \text{ m/s}}, \quad f_1 = \underline{440 \text{ Hz}}.$$

問6 基本振動ゆえ  $\lambda$  は一定値を取る. 波の基本式, および弦を伝わる波の速さの公式, およびつりあいより,

$$\begin{aligned} f_1 + \Delta f &= \frac{1}{\lambda} \sqrt{\frac{M_B + \Delta M}{\rho} g} \\ \Delta f &= \frac{1}{\lambda} \sqrt{\frac{M_B g}{\rho} + \frac{\Delta M g}{\rho}} - \frac{1}{\lambda} \sqrt{\frac{M_B g}{\rho}} \\ &= \underbrace{\frac{1}{\lambda} \sqrt{\frac{M_B g}{\rho}}}_{=f_1} \left( \sqrt{1 + \frac{\Delta M}{M_B}} - 1 \right) \\ &\doteq f_1 \left( 1 + \frac{1}{2} \frac{\Delta M}{M_B} - 1 \right) \\ &= \underline{\frac{\Delta M}{2M_B}} f_1. \end{aligned}$$

問7 与えられた数値より,

$$\Delta f = \frac{4}{100} M_B \cdot 440 \text{ Hz} = 8.8 \text{ Hz}.$$

よって,

$$\begin{cases} |f_4 - 440| = 2, & \therefore f_4 = 442 \text{ Hz}, 438 \text{ Hz}, \\ |f_4 - 448.8| \doteq 7, & \therefore f_4 \doteq 441.8 \text{ Hz}, 455.8 \text{ Hz}, \end{cases} \quad \therefore f_4 = \underline{442 \text{ Hz}}.$$